苫小牧工高
関東六華会
会報
2007.4
第4号
発行責任者
川上　毅
編集
斉藤　弘嘉
木谷　駿夫
藤田　時治

苫工入学からの私の人生が始まる

藤橋　満
（建築二十七年卒
・調布市在住）

卒業して今年丁度五十五年の七十三歳、道南むかわ町（最近穂別町と合併）に住んでいて三年間の汽車通の苫工時代を過しましたその在学中の思い出には枚挙にいとまがない中で、強く記憶に残っているのは『実習の竹本先生』です。

それは入学から卒業までさり気なく暖かくそして優しく、時には皆にわからないように昼休みを利用して竹本先生用の個室職員室に呼ばれた。

そこでは『人生観や社会に出た時の努力・挫けない心・誠実な生き方』などを先生の体験を交えてご指導下さり、後の私の多大な活力となった。私は勉強があまり出来る方ではなかったが、卒業する時貰った卒業証書と精勤賞は苫工在籍の証として、今も大切に蔵っている

就職先は浦河町荻伏の建設会社『中島組』で卒業式の前日にあの（注）十勝沖地震が起き日高地方に倒半壊の大被害が発生し、公共・民間の建造物・修復建替工事の為、浦河町の工事現場に入社間ない私は助手として仕事に就いた。これが実社会への第一歩でした。

ここで二年程プロの厳しさを学び、一人前にはほど遠かったが、その後道内各地の現場の工事責任者として回り始めた。独身の身軽さを生かして『布団袋に寝具と全財産を入れ』トラックの積荷の上に縛り付けの移動だった。その現場は北は網走に始まり浜頓別・西は島牧そして南は黒松内・伊達・苫小牧・遠浅・早来・千歳で中央は栗沢町などこれ以外の現場も点々とし道内をくまなく仕事場としていた。

この時、一大転機となったのは、昭和三十六年の結婚。そして妻と一緒に上京しての『北海道東京事務所』の新築工事の責任者としての対応だった。妻は事務兼賄い婦として共に働き、その年の暮れに竣工に漕ぎ着け、今も永田町に在る。

ここで北海道に戻らず永年お世話になった中島組を退職し、東京の建設会社に転職し定年の六十五歳まで、建設業界一筋に駆け抜けることが出来た。

一筋に仕事を成し得たのは、多くの方々からの支えと助けであり、特に『いい人との出会い』が大きかったと思う。今はもう亡くなられた苫工の恩師・竹本先生で『立ち往生した私に頑張れる力』伝授下さった相田みつお氏が書いている『ひとの世の幸不幸は人と人とが出逢うことから はじまる、よき出会いを』は全く同感で私の人生そのものでした。我が苫工に学んだ一人として、これからも苫工と関東六華会の益々の発展と末永い活動を祈念して、苫工の思いを綴りました。

苫工時代の部活動

羽田　守治
（工業化学科二十九年卒
千葉県在住）

出身は日高三石、列車の本数が少ないうえに、客車と貨物混合の列車はひと駅ごとの停車時間が長く、とても通学は無理で在学中は下宿生活であった。

昭和二十六年の入学時はまだ米は配給制度で、米持参ということが条件であった。リュックサックの米を担いで毎月届けたものである。

◇スケート部に入部

スケートの経験なしで同郷の友達に誘われてスケート部に入った。スピードスケートである。春からリンクに氷が張るまで毎日、陸上でのトレーニング、屈伸運動にうさぎ飛びそして長距離をよく走った。

スケートの練習で一番辛かったのは十二月中旬になると、苫小牧で一番早く氷の張る緑ケ丘の沼まで、毎朝四時起きで凍てつく四キロの道を歩いて、学校へ行く前に練習に通うことだった。

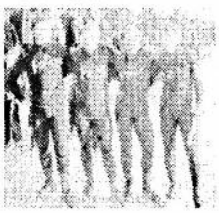
氷の厚みがまだ充分でなく、滑走すると氷がきしみ、表面が沈む薄氷で練習することもあった。一流選手が軽く滑走する後を必死に着こうとして、がむしゃらに蹴って氷を割り、沼に落ちることもあった。

一月下旬になると早い大会が始まり、氷上で本格的な練習は非常に短いものだった。人工リンクのまだ無い時代である。

昭和二十八年のシーズンに、高校生として並はずれた力をもつ、堀、一条の両選手（共に工化二十八年卒で堀選手は日本代表として活躍）を有する苫工は二千㍍リレーで、当時の高校新記録達成か、と新聞紙上で期待された。

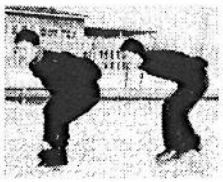
しかし、羽田の記録が悪く実現しなかった。長距離志向でスタートダッシュが苦手だった三年生になったその秋に、胸のレントゲン検査で影が見つかり、スケート競技を続けることは断念せざるを得なかった。

昭和28年1月思い出の
インターハイ北海道大会
リレー参加メンバー



羽田　堀　一条、垣原
の各選手

苫工2年生の時
スケート部の同期との
練習風景



垣原氏　羽田氏

◇山岳部での活躍

いま、私の小さな書斎、パソコンと書籍・書類の積まれた空間に山の本を並べた本棚に「山の足跡」と名付けたノートがある。

入学した六月に苫工校歌にも詠われ、毎日仰ぎ見る樽前山へ、登山募集で参加した。

二年生になって三泊四日で大雪山縦走登山に参加して、山岳部の部員を意識するようになった。

一年生のときから卒業まで、山岳部の顧問は小野先生であった。

三年生のとき、同期生に数人の山好きがいて、北アルプス登山が計画された。道内の高校山岳部としては初の計画と意気込んでいたしかし、学校の許可は得られなかった。佐藤校長に直談判しても頑として拒否された

夏休みに、小野先生をリーダーに、三年生四名、一年先輩の元部員一名、機械科の北側先生が加わって七名の登山隊となった。学校行事ではなく、個人という形式をとった。

松本から上高地に入り、河童橋にたった時、梓川と雪渓を頂く穂高の偉容に圧倒、涸沢にテントを張り基地とした。槍ヶ岳→穂高の縦走には慶応山岳部の堀さんがガイドを務めてくれた。

この様子は小野先生の筆による「北アルプス登山紀」として、三回シリーズで北海道新聞に写真入りで大きく記載された。

昭和二十八年十月、創立三十周年を記念した学校公開の行事があり、その一つとして、山岳部の展示会場をつくり、登山用具の展示北アルプス登山の写真、十六ミリ映写会などを行った。

苫工山岳部ここに有りと志気の高まった時期でもあった。

私が砂川の化学工場に就職した後も、苫小牧に小野先生を訪ね、山の情報交換が続いた。また、残雪期の日高山脈のペテカリ岳へ一緒に登山したこともあった。いまは平地の歩行に支障があって、山歩きは出来なくなり、ヒマラヤトレッキングも空夢となってしまった。

編集メモ

（藤橋さんの十勝沖地震の項）

十勝沖は地震多発地帯で筆者の記載文中にある通り、昭和二十七年三月四日M八、二の激震で学校では授業中だったが生徒は皆一斉に窓から脱出したほど揺れは激しく地面に立っているのが困難なほどで、走行中の列車は転覆し、道内では少ないカワラ屋根の家は損壊、電線は縄跳び紐の動きの如きであった。

しかし激しい地震では大気も揺れ鳥は飛べないと聞いたが飛んでいた。

情報化社会の中での被害にあわぬように常に注意を払いながら生活をしていきましょう

二〇〇六年度の苫工同窓会

関東六華会の総会開催される

会場の都合で、関東六華会の総会は七月一日（土）の午後三時から新宿駅西口のワイズで開催された。

本部からは岩本同窓会会長及び紺屋幹事長の参加を頂き、ご来賓で苫小牧東京事務所山口副所長、苫西樽前会遠藤支部長も同席されて諸先輩の物故者のご冥福を全員で黙祷してから総会が開始されたました。

真夏での開催で参加者が少なかったが久しぶりに逢う面々との楽しい会話が弾んだ。

若年者の後輩の方々に出席を期待して盛会のうちに次年の開催を約束して閉会となった。

2006.7.1. 関東六華会総会スナップ　川上会長挨拶

ご案内とご注意

総会は五月度に開催です。！

二〇〇七年度の関東六華会の総会は五月　十九日（土）に開催されますが詳細は別紙をご参照下さい。

☺ 会員情報たより

同窓会のご案内で各位から頂いた情報をお知らせするコーナーですが別紙記載致しましたのでご覧下さい。

編集後記

二〇〇六年度は荒川選手のイナバウアで金メダル、WBCでは世界第一位、サッカーでは日本選手活躍、一方ジャワ島襲う大地震で多くの人命が奪われた。国内の消費生活は好転がつかめず、5年の任期で小泉から安倍新首相にかわり国会も空回り、今年のお題の「命」がおろそかになり、幼児虐待や子が親を殺傷す事件が多発し、テレビ映像ねつ造事件が発生するし、うつくしい国つくりは絵に書いた餅ではなく、安らぎのある生活が待ちのぞまれるよう会員皆さんの健康をご祈念しております。